
Negima! : NewTranslation

紅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Negima!..New Translation

【Nコード】

N3212V

【作者名】

紅雷

【あらすじ】

—————2007年8月、ボクは忘れられない高校生として最後の夏を体験した。そして、彼女との約束を果たすためにだけに戦い続け全てを終わらせると、光に包まれた。……………これはボク、ハワード・ライトの新たな戦いの物語である。

SIRENは鳴り終える（前書き）

どうして自分はこんなクロスを思いついたんだろう・・・

まったくわけがわからないよ・・・

この小説の感想をどしどしください、それによって続けるか決めます。

SIRENは鳴り終える

————それは1976年の夏、ボクが体験したことだった。

2007年にもう一人のサム・モンローによって羽生蛇村へと導かれた後、ボクは自分より若い女の子（美耶古）が殺されかけているところを目撃した。・・・いや、それ以前にもう一人殺されてしまったのだけれど、その時僕はとにかく必死で美耶古を助けることに夢中になっていた。

結果的に彼女は逃げることができ、ボクも何とか逃げ切ることができたけれどすぐに銃で撃たれて川底に転落してしまった。幸い生きていた（？）から良かったのだが。（赤い水の影響らしい）

そんなこんなでアマナと束の間の出会いをしたり、美耶古と再会したり、身を焼かれてまた転落したり、また銃で撃たれたりしてループした後、繰り返しているという現実を理解して再び美耶古と行動を共にした。・・・またまたアマナにやられたんだけどね。

ベラと一緒に屍人ノ巣へ潜入すると、火だるまにされて異形の怪物モンスターと化し、村の医者らしき男によって「いんふえるの」へと押し戻された美耶古の姿を目撃してしまったボクは途方に暮れて赤い水の池を見つめる。するとゴーストとなった彼女がボクを最終決戦へと導いてくれた。その途中、医者の男が宇理炎をくれたり襲いかかってきたりと本当に苦労したよ。

そして、アマナによって成体になった蚕子の仕業で異空間に引きずり込まれ（吸い込まれたといった方がいいかな）万華鏡のような場所に放り出されたボクは、託されたカタナ《焰薙》に美耶古の指示

通り宇理炎の炎を纏わせ新しい依り代とし成体へと炎を放ちながら何度も切り裂き倒した。

———だが、そこで全てが終わったわけじゃない。

美耶古と約束した通り、ボクには「全てを終わらせる」という役目があった。だから、たとえどんなに時が流れようと孤独だろうとただひたすらに戦い続けた。外の世界を見たいと言った彼女を、自身の命を救い導いてくれた彼女への贖罪という名の戦いを……………

「イイカゲン、キエロ!!」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

宇理炎の煉獄の炎を数メートル先にまとまっている数体の怪力屍人へ放ち、浴びせかけるように肩にかけた散弾銃を構えて撃つ。屍人が抗えない苦しみにもがき苦しむ中、ハワードは容赦のない斬撃を与える。

「ミヤコとの誓い、今ココで果たす!!」

次の瞬間、永遠に思える時の中で幾度も戦い続けた彼は握りしめた日本刀でやっと村に現存する最後の屍人の討伐を終わらせることに成功した。

彼は周囲に自分以外の存在がないことを改めて確認し、適当な岩の上に静かに腰を下ろす。

「ミヤコ・・・約束通り、ミンナ終ワッタ・・・」

美耶古の血を分け与えられた影響で不老不死と化した彼は18歳のままの顔に溢れるほどの雫をこぼす。その雫に込められるのは約束を果たした達成感と異界の村に自分一人しかないという寂しさだ。

「・・・コレカラ、ドウシヨウカ？」

命を脅かす存在はもういない。

やろうと思えば生活していけるかもしれないが、そんな孤独な生活に耐えて生きていけるかと考えれば無理な話だった。しかし、この狂った村から脱出する術など自分には持ち合わせていなかった。だから、結局はここで生きていくしかないのだ。

涙を袖でふき決意新たに立ち上がると突然霧に包まれていた空が急に輝く。

「マ、マブしい・・・！！！」

思わず手で顔を覆って強烈な光に耐えるハワード。

だが、そんな行為も空しく光は彼が居た場所全てを飲み込んだ。

「————起きて、お願い。起きて……………」

「ミ……ヤコ？」

忘れもしない声で自分を呼びかける存在が体を揺さぶる。まだ光のせいで視界が安定していないのかぼやけて周りが見えるけれど、確かに自分が知っている存在がそこにはいた。

「ココは……………」

そこはかつて見た一面真っ赤な世界とは違い宇理炎の色のように青白い安心できるような空間だった。どうしてボクはこんな所にいるのだろう、あの呪われた村から出られないはずなのに……………」

「ありがとう……貴方のおかげで全てが終わったの。ちゃんと約束守ってくれたんだね」

「約束ダカラね……それよりミヤコ、どうしてココにボクと君がいるんだ？」

「それはね……あの終わった世界にいつまでも貴方を残すわけにはいかなかったらしいのよ」

「らしい？ 一体ドウイウ事？」

自分があの村にしていると不味いって……意味が分からない。まあ別に居たいってわけじゃないけれど、できれば納得のいく説明が欲しいものだよ。

『そう急かすな、ハワード・ライト』

「ワアッ!？」

突如として投げかけられた言葉に驚き体を震わせる。なんと気づけば背後には日本の鬼・・・いや、閻魔だったかな? いかにもそんな顔をした男が立っていた。あ、閻魔ってちゃんと書いてあったよ。

『実はな、あの屍達をようやく成仏させてくれたお前にお礼として別の世界に飛ばしてやろうと思っているのだ』

「けど、ボクはアレでも人殺シタのには変わりナイ・・・ソレはどうする?」

『フン、いつまでもあんな世界が存在することに比べたら遥かにお前の罪など安いものだ。そこは気にせんでいい』

「ハ、ハア・・・よくワカンナイけど何かよくワカッタ」

ちなみにミヤコもボクに協力したのだから同等の礼をしたいと随分前に言われているらしい。しかし、ボクが戦い続けているのを見えずっと待ち続けていたのだという。

「私は貴方と一緒にいたい・・・そして、今までできなかったことを沢山やりたいの」

「良いの? こんなボクでも・・・」

「貴方じゃないとダメ、もう離れ離れになりたくない!!」

手を両手で強く握りしめて願う美耶古の悲しむ顔をもう見たく無ない
とハワードは彼女を抱き寄せ髪を撫でる。

「ワカッタ、絶対君ともうハナレナイ!!」

今度こそこの美しい命を守り通す。だから、ボクはどんな世界であ
っても彼女の為に戦おう。

『話はまとまったようだな……世界の選択はランダムだが、
あの狂った世界のようなところには行かないようにしてある』

ついでにお前達の力はそのまま持つて行かせてやろうと問答無用で
閻魔大王は決めると、パチンと指を鳴らす。すると下にポツカリと
眩い光を放つ大きな穴が開いた。

『さあ、その穴に落ちるんだ……手を離さないようにな』

促されるように手を握り、互いに見つめあうと小さく頷く。

————そしてボクらは、新たな世界へと旅立った。

SIRENは鳴り終える（後書き）

あのサイレンとクロスするのは難しいけれど頑張ってみます。

ちなみにハワードと美耶古が原作であまり救われていないと思ったから衝動的に書きました。

女の子は命懸けで死守せよ（前書き）

このハワードは日本のアニメやバラエティー番組に詳しいという設定です。

だから、時々変なことと関連付けます。

ちなみになんか二度寝して赤い和服の少女が夢に出てきましたが、
なんだったのでしょうか・・・？

女の子は命懸けで死守せよ

「きゃあああああああああああああああああ!？」

「ミヤコオオオオオオオオオオオオオオオー!!!!!!」

穴に落ちて第一声がそれでした。

・・・だって、僕らが今いる場所は普通ハングライダーで飛んだりする高度なんだよ？生身で飛ばされでもしたら悲鳴を上げるに決まっているじゃないか。って、そんなことより何とかして安全に着地しないと確実に二人のミンチが出来上がってしまう。死なないからって痛い目に遭うのは嫌だからね!!

「宇理炎もイチオウ炎だ!!ウマく使えば減速させることがデキるかもしれない!!」

一か八かの機転を利かせて左手に宇理炎を出現させると連続的に炎を噴出させてみる。すると、幸運にも減速を開始し始めて何だかふわふわ飛んでいるように感じられるようになった。・・・宇理炎、スゲー。

でも、それでも落ちているのには変わらないわけでした。ミヤコを日本というお姫様抱っこし来たるべき衝撃に備える。大丈夫だ、昔観た「見た目は子供の高校生探偵と同じ名前の未来少年」だって同じようなことができたんだ、ましては自分は不死身・・・やれないわけがない!!

「ヤッテヤル！！」

比較的周りに木が少なく岩もないキャンプでもできそうな場所に狙いを定め、両足に力を込める。同時にミヤコを抱きかかえる力を強め誤って激突することがないように注意する。

そしてボクは全身を一瞬痺れさせた後、奇跡的に着地に成功することができた。ありがとう、コロン（未来少年の方）。

「だ、大丈夫？」

「ミヤコこそ大丈夫？ドコか怪我してない？」

「私は大丈夫・・・けど、貴方はあんな高さから着地したのよ、何か怪我してない？」

「アー・・・足がシビレルだけでナントもないよ」

例えて言うのなら、ハワードの美耶古さんの血のおかげでしたって感じかな。

「それよりも・・・ココはドコなんだろう？」

「落ちているとき見たけど電気の明かりが沢山見えたわ、人がいる

ことは確かみたい」

「問題はココがドコの国かってコトか……………」

英語なら自分に対応できるし、日本語なら少しは自分でまたは美耶古が対応できる。でもそれ以外になるとマズイな……………国際公用語の英語がちゃんと使われていればいいんだけど。というか、ここが本当にボクが知っている地球なのかどうかも怪しい。異世界語とかやめてくれよ？

「……………こうなったらシカイをジャックしてみるよ」

それが一番手っ取り早い方法だった。羽生蛇村でも物凄く役に立ったし、今の状況下でとても重宝する能力だ。少し森の外側へと近づき背中にあったリュックを美耶古に預け茂みへと隠れるよう指示すると自身もしゃがみ込み視界ジャックを開始した。

『……………那……………する……………耐え……………るか……………』

『な……………とか、だが……………時……………の問題……………』

日本語……………それも女の子の声か？

見たところ何かと戦っていて片方は狙撃銃をもう片方は刀を持っているようだけど、何だかなり危ない状況のようだ。この様子をと

りあえず簡単に美耶古へ説明すると助けに行った方がいいと言われた。

「せっかくこの現地人が見つかったのに振り出しに戻るのはいくはないわ・・・危険だけれどもお願い、助けに行つてあげて!!」

「わかったミヤコ!!そこでジツとしてて、スグに戻るから!!」

日本刀・焰薙を右手に宇理炎を左手に携え茂みから一気に躍り出るようにハワードは飛び出す。目指す先は今も必死に戦っているであろう少女の所だ。彼は美耶古を助けられなかった時のように手遅れになってしまわないよう全力で気配を頼りに駆けだした。

―――一方その頃、戦い続けている少女たちは窮地に陥っていた。

敵の陽動により自分たちが受け持っているエリアに大量の異形が攻めてきたのだ。しかも、彼女たちの増援は足止めされているため見込めず満身創痍ともいえる戦いが繰り広げられていた。

「龍宮！！もっと弾幕を強くしてくれ、でないともう持たないぞ！？」

「わかっている！！だが、数が多すぎて撃っても撃ってもきりがない！！！」

服を切り裂かれながらも女剣士の少女は勇敢に戦い細かい敵を排除していたが、大型の敵はそうもいかない。迂闊に近づけば捕られられ命を落とす危険性がある。だから、射撃によって怯ませた後に一気に叩くという戦法を取るべきなのだが、何せ数が多いためなかなかその戦法を取れないという状況が続いていた。

「くそ、こうなったら………神鳴流奥儀、真……雷光剣！！！！」

著しく気を消耗するのを覚悟して捨て身の一撃を目の前の異形に放つ桜咲刹那。彼女の活躍により多くの敵が滅せられたかと思われたが現実はその上手くはいつてなかった。後方にまだいたと思われる鬼による一撃が容赦なく刹那の前に叩き込まれる。

「刹那！？」

龍宮が叫ぶも刹那は衝撃波を受けた影響で意識はあるものの動けなくなってしまう。つまり、もはやこのエリアは龍宮一人で担当しなければならなくなってしまったのだ。

「半魔族化するしかないのか・・・!？」

ここ数年暫らくしていなかった変身を今ここでしなければならぬのかと迷うほど彼女の思考は窮地に陥っていた。だが、仲間のために決断し秘められた力を解放しようとしたその時————周囲にいた鬼たちが急に青白い炎に包まれ苦しみ始めた。

「な、何やこの炎は!？」

「熱い熱い熱い!!!!!!」

龍宮はすぐに炎の進行方向とは逆を辿り、謎の攻撃を繰り返した者の姿をその瞳でとらえた。そこには刹那を庇うように立つ光る箱のようなものと日本刀を突き出している外国人の青年が立っていた。

「・・・ジャパニーズデーモンか、屍人^{ヤツラ}に比べたらまだカワイイ方だ!!!」

天に光る箱を掲げると青年は上空から流星の如く炎を鬼たちに向け放ち、もがき苦しむ鬼たちの間を縫うように走り斬撃を与えていく。

「G o t o h e l l ! (地獄に落ちろ!)」

最後にトロールのように巨大な鬼を豪快な叫びと共に一刀両断すると彼は全ての異形を退治し終えてしまった。そして、負傷している刹那の下に駆け寄ると人一人が横になれそうなベンチをちらりと見て抱え上げ走って行った。

慌てて龍宮もその後を追っていった。

「傷は浅い・・・ダボクぐらいか・・・」

持っていたハンカチを適当に濡らし患部に優しく当てると呻き声を上げながら刹那は声を漏らす。

「あなた・・・は？」

「ボクはハワード・・・ハワード・ライト、君は？」

「刹那・・・です・・・桜咲刹那・・・」

刹那は見たところ女子中学生のようだが、もしかしたら小柄な高校生という可能性もあるけれど。とにかく、彼女を本格的に治療できる場所に連れて行かなければならない。ここでできるのは簡易的な処置しかできないのだから。そう思った矢先、彼の後頭部に銃口が突き付けられた。

「What!？」

「・・・動くな」

かつて村の警察官に拳銃で撃たれた経験がある彼は、素早い動きで銃口から後頭部をずらし距離を取り構える。だが、刀は構えない・・・あくまで手ぶらで警戒するように立つだけだ。

「何者だ貴様は・・・どうやってこの麻帆良学園に侵入した？」

「・・・マホラ、ガクエン？ ココは学園なのか？」

道理で広いと思ったらそういうことなのか。

何か周りが西洋風の建物ばかりだからてっきり何処かの都市だと思っただけだ。

「待て、ここが学園だと知らないで侵入したのか？」

「ウン、気づいたらミヤコと一緒にココにいた」

「・・・連れがいるのか？」

「ソウ、近くで隠れるよう言った。ココがドコだかわからないし・・・」

「分かった、少し待ってくれ」

目の前の褐色の少女は銃口を向けたまま携帯を取り出し何処かへと連絡を取り始めた。多分、横になっている彼女の救護と自分達の事を報告しているのだろう。とりあえずその間に隠れてジツとしている美耶古を呼び寄せ、自分が嘘を言っていないことを証明しつつ警戒を解いた。

「・・・学園長からの指示だ、二人にはついて来てもらう」

美耶古からリュックを受け取ると、ボクらは促されるまま学園内の学園長室へと案内された。

女の子は命懸けで死守せよ（後書き）

次回、説明回。アーカイブ・ラッシュュ!!

それにしてもこの小説を書くとき、やけに自分はノリノリである。

2007（現実）↓1976（異界）↓2002（平行世界）（前書き）

リアクションプリーズ！！

アーカイブのロイヤルストレートフラッシュをどうぞ。

2007（現実）↓1976（異界）↓2002（平行世界）

龍宮と名乗った少女に連れられ学園長室を訪れることになったハワードと美耶古。ハワードは懐かしむように建物中を眺め、美耶古は今まで見ることができなかった外の世界の景色に心奪われていた。

「ここが学園長室だ・・・」

ドアノブを回し、部屋へと招き入れられるとそこには後頭部が異常に成長した老人が座っていた。これで目から血を垂らしていたりしたら屍人と確実に間違えるだろうなあとハワードは内心思った。

「・・・ほう、お主達が謎の侵入者かのう？」

「ええ、まあ・・・侵入シタクてしたわけじゃナイですが」

「すると偶然この学園へと来てしまったということか？・・・ふむ、質問を変えよう。お主達がここに来る前にいた場所はどこかの？」

ここは普通に「羽生蛇村」から来ましたというべきなのだろうか。いやしかし、そんな村はないと確認を取られればこっちが不利になる。ならば、こちらから確認してみようか。美耶古に耳打ちしその旨を伝え質問してもらう。

「その前に質問したいのですが、『羽生蛇村』という村はご存知ですか？」

「『羽生蛇村』？・・・いや、聞いたことがないのう」

「そうですか・・・なら、よかった」

問題はその後どう説明するかだな・・・今まで集めた資料が役に立てばいいんだけど。ガサゴソとリュックの中を漁り古ぼけた郷土誌を見つけると『羽生蛇村ニオケル来訪神信仰』と書かれたページを開き、学園長へと手渡した。

「コレがボク達がいた場所にあったキョウドシです」

「郷土誌？・・・どれどれ」

近衛近右衛門はわざわざ開かれたページを注意深く読んでゆく。そこに書かれているのは以下のような内容になる。

『羽生蛇村郷土誌』

昭和二十四年発行

著者 三田村秀人

— — — — —
— — — — —

羽生蛇村ニオケル来訪神信仰

古来、羽生蛇村ハ常世ノ境ニ位置シテイルト信ジラレテイタ。

ソノ為、外カラ寄り来ル存在ヲ神ト仰グ来訪神信仰ノ起源ハカナリ古クマデ遡ル事ガデキル。

最古ノ来訪神伝承ニオイテハ、

美耶古トイウ名ヲ与エラレタ依巫ガ来訪神ニ祈リヲ捧ゲテイタト伝エラレテイル。

シカシアル時期ヲ境ニ来訪神信仰ハ影ヲ潜メ、

新タナ来訪神ヲ仰グ眞魚教ガ村ノ信仰ノ主トナツタ。

眞魚教ノ教エハ、御蚕子様ガ我が身ヲ犠牲ニシテ村ヲ救ツタトイウ伝承ヲ主軸ニシテイル。

コレハ異教ノ影響デアルトハ思ワレルガ、ソノ子細ハ不明デアル。

眞魚教ハ異教トノ習合ニヨリ新タナ宗教感ヲ村ニ植付ケタガ、

アル時期ヨリ、権力者ノ弾圧ニ遭イ、ソノ教エハ秘教ノ様相を呈シテイツタ。

シカシ異教解禁後、羽生蛇村一ノ豪農デアッタ犀賀家が眞魚教復興ニ尽力シ、

再ビ御蚕子様信仰ハ復活シタ。』

これは要約すると、時を越えてしまったベラがアマナと化すまでを表している。この事に気づいたのはループ現象とサムの言葉と行動について考えてみたからだ。

「これは・・・・・・?」

「ボクが訪れたミヤコの村にありました。……信じられないかもしれませんが、コレは1976年の羽生蛇村で見つけたモノです」

「1976年じゃと!? ちょ、ちょっと待てお主……その言い方では……」

「タイムスリップした……と考えているのはわかります。ですが、アレはタイムスリップより生易しいモノじゃなかった……」

彼の口から語られるのはたった一人現実の世界に帰還したサム・モンローの手紙に始まり、羽生蛇村の謎の生贄の儀式、屍人と化した村人からの逃亡、アマナとの出会い、美耶古との再会、ループの真実、「いんふえるの」での成体蚕子との激闘、その後の殲滅戦だ。

どれも俄かには信じられないことばかりではあるが、話すと同時に提示していったリュックの中の資料と照らし合わせると信憑性が増大した。特に異界と化した羽生蛇村で出会った屍人の記憶を見せると（最初は絵でも描こうかとしたが、魔法使いだということを話され村の事だけを見ることを条件に見せた）、明らかに驚いていた。

「……すると、ハワード君は今が2002年じゃから約5年後の人間で美耶古君が1976年じゃから約26年前の人間ということじゃな」

「といっても、この世界に『羽生蛇村』が存在しないコトを考える

と『平行世界の』という言葉がつくコトになります」

まさか閻魔大王に送ってもらったとは言えないので途中誤魔化した点もあるが、果たしてどう対応してくるかなこの学園長は……・

「……うむ、お主らがこの世界の住人ではないことはよく分かった。……そこの、ハワード君は先生を美耶古は学生をこの麻帆良学園でやってみないかの？」

「え!?!」

「エエ!?!」

突然の提案に驚く二人。何せ彼らはこの世界で戸籍すらない人間、真実を知ったところで置いておく必要もないはずだ。

「戸籍も生活の方もこちらで補償しよう……ただし、さっき言った通り魔法の事はくれぐれも話さないことが条件じゃ」

「口止め料ですか……それにしたって待遇が良すぎませんか?」

「そう思われるの百も承知じゃ。早い話がハワード君、君には広域指導員として警備にあたってもらいたいのじゃよ」

「警備というと・・・女の子達と戦っていたヤツらの退治をするコト？」

「それは裏の警備の事じゃな。表向きには風紀委員の先生版と考えればよいじゃろう」

つまり、表向きには先生として問題行動を起こす生徒を取り締まり、裏向きには敵対組織の侵入を取り締まれということか。・・・・・・・・上手くやれるかな？

「最初のうちは戸惑うこともあるじゃろうからサポートをつける、安心せい」

「ハ、ハア・・・わかりました」

ここで断ってホームレス生活を二人して歩みたくなないので意を決してハワードはその提案を引き受けた。

こうして麻帆良学園での新たな生活を手に入れたハワードと美耶古。彼と彼女の存在は果たしてどのような影響を世界に及ぼすのか、その行方はまだわからない。

2007（現実）↓1976（異界）↓2002（平行世界）（後書き）

ネギはアンチせずちゃんと教育し真人間にする。それが私のモットー¹。

登場人物設定

ハワード・ライト (Howard Wright)

主人公。元々は2007年の人間で1989年7月30日生まれ。東京のヨリミ・インターナショナルスクールに通っていたごく普通の若者である。2007年の5月から日本で自身のブログを立ち上げている。(何でも日本語の勉強らしい。) 片言ではあるが大体の日本語は話せる。

1976年の現実世界にただ一人帰還したもう一人のサム・モンローの手紙により羽生蛇村を目指すことになるが、そこで時空の歪みの影響で異界に存在する1976年の羽生蛇村に介入し美耶古を儀式から逃がしてしまう。同時に自身も逃げるものの殺したはずの警察官に胸を撃たれ転落し赤い水の力で蘇生した。(ただし、屍人化は徐々に進行)

その後、様々な出来事を経て美耶古と再会するも本来の使命(生贄を捧げる役目)を思い出したアマナにより美耶古を奪われた挙句、身を焼かれてしまう。そして、屍人ノ巣を目指すもそこには頭脳屍人と化したベラがおり半狂乱したメリッサに撃たれてしまう。↓ウロボロスの輪不成立。

時が遡りループすると、美耶古が自身に血を分け与えたことやアマナが敵であることを理解し再び美耶古と再会することを目指し、見事再会。しかし、美耶古と一緒に刈割の封印を解くも覚醒したアマナに美耶古をまた奪われ気を失う。(そこを犀賀省悟に助けられる)偶然一緒だったベラと共に救出を決意し二度目の屍人ノ巣の攻略を試みるも、時既に遅し。火だるまと化した美耶古が不完全体の幼体蚕子となって犀賀省悟を襲い、犀賀省悟の命と引き換えにいんふえるのに押し戻された。

途方に暮れるハワードだったが霊体となっていた美耶古の導きと犀賀省悟から託された蚕子を倒すための切り札である宇理炎と日本刀・焰薙を受け取り、いんふえるのへ突入。アマナによって完全体と化した成体蚕子を美耶古のサポートの下、倒し終えると約束を果たすために羽生蛇村の全ての屍人の殲滅を開始した。

今作では事の真相にほぼ全て気づいて約束を果たし終えた彼が、もはや存在の意味のない異界の羽生蛇村を完全消滅させることから闇魔王に助け出され、屍人という成仏することができない存在を成仏させたお礼に別の世界へ美耶古と共に飛ばされることになった。不老不死は健在で宇理炎と日本刀・焰薙、散弾銃、狙撃銃等を扱い戦う。ネギのサポートにつく予定。

ヒロイン

神代美耶古

全てが謎に包まれた少女。ハワードにより生贄から一度救い出された。

一度目の世界ではハワードと合流後に屍人になっていた犀賀省悟に撃たれた挙句、アマナに連れ去られ火だるまにされる。二度目ではループに気づいたハワードと共にもう一つの力の封印を解除したが、またまた連れ去られ火だるまにされてしまう。途方に暮れるハワードに希望を与え最終決戦に臨ませると、自身も彼の力となり成体蚕子を倒すことに成功。その後は彼が約束を守ってくれるのを見守っていた。

今作ではハワードと共に転移し、念願の外の世界での生活を開始する。ハワードとはもう恋人同士。戦闘には不参加予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3212v/>

Negima! : NewTranslation

2011年8月15日21時35分発行